令和 6 年度　独立行政法人日本スポーツ振興センター新博物館展示・運営に関する有識者懇談会
（第 6 回）議事要旨

1．日時　令和 7 年 1 月 27 日（月）10：00～12：00

2．場所　独立行政法人日本スポーツ振興センター 外苑事務所

3．出席者
・委員（計 11 名）
荒木絵里香委員、伊藤卓司委員、沓沢博行委員、栗原祐司委員、建石徹委員、田良島哲委員、
萩原恒昭委員、町田樹委員、柳谷直哉委員、山神孝志委員
（オンライン）大林太朗委員（途中参加）
・事務局
大西（啓）理事兼館長、三澤主幹、新名主幹、木村学芸員、寅ヶ口施設部企画調整役

4．議事内容
議題（ 1 ）展示基本設計業務の現況説明
事務局より資料 2 について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。
◆オープンギャラリーにおけるラグビー展示検討案について（山神委員による説明）
○エントランスからのアプローチとなるため、できるだけシンプルにする。秩父宮ラグビー場ができた成り立ちとラグビー界の過去や未来についてシンプルに展示したい。ラグビーの歴史や W 杯の常設展示等を考えている。次の W 杯日本開催の招致の話もあるため、機運醸成としたい。エントランスでもあるため、立体物の展示は好ましくないと考え、協会内でまとめた内容を提案した。

◆オープンギャラリーにおけるラグビー展示検討案について（各委員による意見）
○展示ケースは可変性のあるつくりが望ましい。
○デジタルを導入するなら電気工事の兼ね合いもあるため、導入するかは早めに決めなければいけない。

議題（ 2 ）新博物館の開館を見据えたネットワーク構築と諸課題への取り組みについて
事務局より資料 3、4 について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。
◆新博物館の事業内容と機能の整理について
○要求水準書に来館者のピーク時想定 80 名程度とあるが、開館してみないと実際は分からない要素が多くあるので留意すべき。

◆アーカイブ＆研究機能としての博物館の可能性について（町田委員による事例報告）
○2023 年 11 月にローザンヌにあるオリンピックスタディセンター（以下、OSC）へ研究のため訪問したが、個人宅を改造して図書館のようにしている。カテゴリー別エリアに分かれており、第 1 回のオリンピック大会から最新のオリンピック大会のプログラム（パンフレット）やスポーツ科学の研究書

等が収められている。印刷スペースも設けてあり、研究者がいつでも複写できるようにしてある。研究者が書籍を見ながら研究できるスペースも設置されている。

○2023 年 11 月以降は一時閉館し、資料のデジタル化に取り組むと聞いた。

○IOC と各競技連盟（IF）のやり取りも公式文書とされ、これらを徹底的に保管している。

○文献探索の際は、担当のアーキビストがつき、手厚いサポート体制がある

○IOC 総会の資料は、1984 年設立後の第 1 回から全て電子化されて小さなハードディスクに収まっている。昔は有料だったが現在は無料。現地へ行けば複写も可能であり、資料の公開や提供もオープンになった。IOC の個人的なメールやファックス、競技連盟との書簡等も現物（カーボンのような薄い紙）がアーカイブされていた。OSC のネットワークからオリンピックワールドライブラリー（以下、OWL）を通じて無料で公開している電子資料は、世界各国から閲覧・取得が可能になっている。現地のネットワークから接続すると、閲覧可能な資料は増える。

○「ここにしかない／ここに行かないと見られない」資料のアーカイブや ISBN（International Standard Book Number）がつかない資料（エフェメラ・公式文書（瑣末なものを含む）・競技会のパンフレット／プログラム・スポーツ及び身体文科系の展覧会カタログ・写真／映像）を収集するとよい。

○研究者目線だと、資料は一箇所に集積されていた方が便利だ。

○オリンピック博物館の予算については分からないが、大理石にスポンサー企業名が刻まれており、中国や日系の企業が大部分を占めていた。

○IOC のデジタル化資料を展示に利用する場合は権利問題もあると思うが、オリンピックムーブメント促進の理念に沿う展示であれば交渉しやすいのではないか。

◆アーカイブ＆研究機能としての博物館の可能性について（各委員による意見）

○資料収集にはコストがかかるが、収集にコストをかけない工夫も必要。ある機関と交流することで収集や保存にも協力してもらえるような関係が作れる可能性がある。そういう意味では、収集・保存と交流はセットと考えられるのではないか。

○例えば、競技会のパンフレットや写真は各競技団体（NF）が統括している。競技団体と組織的に収集網や交流網ができたら収集にかけるコストの削減に繋がる。但し、物が集まってくると博物館の空間を圧迫しコスト増となってしまうため、デジタル化できるものはデータで残すという流れを築けるとよいのではないか。

○現在の秩父宮記念スポーツ図書館の OPAC はクオリティーが高く使いやすいため、OPAC 自体をより周知させるのがよいのではないか。新博物館・図書館では、ウェブサイトもリニューアルするものと推測しているが、オウンドメディアのようにして独自のコンテンツを展開しながら、そこに OPAC 機能も付加すれば色々な人達が利用できる。OWL もそのような試みをしているため、参考にするとよい。

○蔵書の数では、秩父宮記念スポーツ博物館・図書館（以下、秩父宮）のほうがローザンヌのオリンピック博物館より多いのではないか。

○研究者目線では図書資料は一箇所にまとめてほしい。外部倉庫を借りるのではあれば、図書資料は全てそちらに置いて図書館として独立させる案もありえるため、検討するべきだ。

○もし、外部に図書館機能が設けられることになっても、博物館でも図書資料を見られるようにするの

がよい。博物館に来館した研究者が図書館まで行かずとも資料を閲覧できる仕組みもあるとよい。
○図書館を別で設ける話は出ているが、研究者の利用だけではなく一般も含めて閲覧可能な形を設けるのかどうかなど様々な与条件があるので、図書館をどのように運営していくのかよく検討する必要がある。

◆スポーツ関係団体等とのネットワークの構築について
○東京文化財研究所の図書室は、大学と補完しあいながら日本美術史関連の資料を所蔵している。様々なデータベースも公開しており、研究所に来ていただくと見ることができるものと世界中からインターネットにアクセスできるものがある。できれば全てをインターネットで公開したいが、色々な制約もある。秩父宮もなるべくインターネットで公開し民主的にというのと、ここにしかない唯一性をうまいバランスで両立いただきたい。誰がどういう風にその仕組みを作るかということや、予算や人材の確保は今度の課題になる。
○私の競技団体では資料の収集やアーカイブに関する動きはない。資料のデジタル化と公開の仕組みがあるともっと多くの方々に見ていただけると思う。
○収蔵の物理的な問題はあるが秩父宮で各競技団体の資料をコレクションするとか、せめてデジタルアーカイブで収集するなど、そういった動きを検討しているか。
○秩父宮では競技団体の歴代機関紙等があるのは確認しているが、どのような形で収集を続けられるか、デジタル化含め今後の課題である。
○これまでに発行された競技団体の年史をひっかかりとして、各団体の事業内容を確認したり、各団体でそういう事業をやっていた方とつながったりすることが、資料収集につながるのではないか。
○年史すべてを競技団体にコレクションしておいてもらうことは難しいかもしれないが、年史が発行されるタイミングに秩父宮から「年史をデジタル化し情報共有しませんか」と働きかけて、せめて秩父宮ではデジタルアーカイブという形で資料を共有してもらうことは可能かなと思う。
○例えば、どの大会で誰が 1 位や 2 位だったかの情報はインターネットで調べればすぐに出てくるが、その大会にどういう人達が出場していたか等の全体像をつかむにはパンフレットをあたるしか方法がない。マイナースポーツの競技団体は、パンフレット等を作っても消失や散逸してしまっている。ネットワークを築いて半ば強引にでも資料提供してもらいアーカイブしていくことは資料を守っていくためにも必要。

事務局より資料 5 について説明があった。委員からの主な意見は以下のとおり。
○秩父宮の主催以外にも学術学会や Museum2015 などのシンポジウムの際にスポーツ博物館をテーマに取り上げてセッションしたり、様々な活動や議論はしてきた。そろそろ単発的にやって終わりではなく、具体的なネットワーク構築をしてほしい。
○ナショナルセンターとして、日本のハブという立場でもあるため、IOC 等の国際的な会合のイニシアチブをとっていくべき。
○国立科学博物館では、文化庁のイノベートミュージアム事業の補助を受けて海外から招集しシンポジウムを開催した。秩父宮も補助金を申請してみてはどうか。
○将来的には日本が主催し、韓国や中国の方々を呼びスポーツミュージアムネットワーク会議をするの

がよい。事務局の負担は大きいがそろそろ国際的な活動をやってもよいのではないか。

○スポーツに関する展示等をする際、資料が色々なところに所蔵されており、物が多岐にわたるためどこにあるか把握することが難しい。そういった情報を整理した上で公開できると、活発化できるのではないか。

○様々な権利問題をクリアするためにもスポーツ博物館がハブになるように、ネットワーク構築の際は考慮いただきたい。

○日本の大学のスポーツ博物館が増えているが、大学間でのミュージアムや資料室同士をまとめるようなネットワークは現状ない。

○スポーツ史学会など学術学会ともネットワークを結べれば、より資料の保存や公開が進むのではないかと思う。

○秩父宮が取り組むのに優先度が高いのは、競技団体や競技者個人への発信ではないか。メジャースポーツかマイナースポーツかによって競技団体の資料の保存に大きな差があるのであれば、そこをクリアしないと資料収集自体が成り立たない。

○例えば、奈良文化財研究所は各地の埋蔵文化財に係る報告書全文をデジタル化しインターネット上で公開している。集約的にデータベース公開ができている理由は、文化財研究所が多くの研修を地方自治体職員向けに行い、信頼関係が築けているからだ。ネットワークの構築には参加者側のメリットと秩父宮側が得られる情報がある程度比例しないと成り立たない。

◆その他

○ICOM（国際博物館会議）の歴史考古委員会の中でスポーツミュージアムの国際的なネットワークを広げる活動を精力的にやっており、今後アジアとしてスポーツミュージアムのネットワーク強化を図ろうという話が出ている。ソウルに新しい国立スポーツ博物館が建設中であり、2026 年に開館予定なので、韓国と連携できるとよいのではないか。

○各競技団体の広報の方々を招き、競技団体内での文書保存等の課題を語ってもらうような企画は面白いのではないか。

会議閉会に際して、事務局から 3 月にシンポジウムの開催を予定している旨、来年度も継続して有識者懇談会を開催する旨連絡があった。

（以上）